環境問題を考える芽を育てる

～森林教室をとおして子どもたちの意識が変わる～

関東森林管理局東京事務所　関　清孝

はじめに

今年で第25回目を迎える「森林は友達！作文コンクール」は、森林の大切さを次世代を担う子どもたちに理解してもらおうと、平成9年に東京林業土木協会設立45周年記念事業として実施され始まりました。

旧東京営林局管内の営林署等が実施する森林教室や林業体験に参加した小学校4～6年生を対象に、体験を通じて感じたこと、思ったこと、学習したこと等を作文に書くことによって、森林・林業に関する理解や関心をより深めてもらう機会となったことは言うまでもありません。

5校304名でスタートした当事業は、ゆとり学習の政策などもあり年々参加数が増え、今では少なくとも20校2000名もの子どもたちから作品が寄せられるようになりました。

作文コンクールの流れ

森林管理署等が実施する森林教室や林業体験に参加した児童が作文を書く

⇓

小学校等で１次審査として作文数を2割に絞り込み、森林管理署等へ送付する

⇓

森林管理署等で２次審査として更に作文数を半分に絞り込み、

作文コンクール実行委員会事務局へ送付する

⇓

作文コンクール実行委員会において最終審査を行い受賞者を決定する

⇓

受賞者への通知、表彰式の実施

森林教室をとおし自然環境への意識が高くなる

過去の作品集を読み直してみると、各署等で実施している森林教室は、工夫を凝らし関わった職員の熱い思いが込められています。そして、それを聞き、体験した子どもたちからは感動と併せて未来を見つめる意識を感じとることができます。森林教室自体は1日ほどの学習でしかありませんが、森林教室をとおして子どもたちの心に環境を考える種をしっかりと蒔き付けていることが判ります。

講義編

注）作品集を作る際に、各森林管理署等から活動の様子としてご提供いただいた写真の一部を使用させていただきました。

体験編

森林教室での変化

各署等が工夫を凝らしたプログラムを作成していることは言うまでもありませんが、そのプログラムが子どもたちに変化をもたらせています。作文から読み取れるのは、話を聞くことによって考え方に変化が現れ、体験することによって達成感が生まれています。疑問に思ったことは自分で調べ、両親や先生に聞いたりして理解を深めていっています。

新型コロナウィルスの感染拡大によって学習の進め方も変化してきており、子どもたちにはタブレットも与えられるようになりました。調べようと思えば即座に調べられるような環境になっています。私たち講義をする側も、森林の機能・森林の働き・森林の置かれている現状などを子どもたちにわかりやすい言葉で話しかけていくことが求められます。そうすれば子どもたちが森林に関心を持ち、ひいては環境問題に対する見方も変わってくるのではないでしょうか。こうした子どもたちを増やしていくことが大切だと思っています。各署等において環境教育を実施できる体制とフィールドの確保、地元小学校等への営業活動などゼロからの出発は大変なことですが、私たちは実行できるノウハウを知っているはずです。

さいごに

この発表は未来ある子どもたちに自然環境を考えていってもらいたいと思い作成いたしました。そこに私たちがいかに関わっていくかを考えていただきたいと思ったのです。子どもたちが講義や体験をとおして考えていることや感じたことを文字で表現してくれます。話したことがうまく伝わっていないと感じ取れば次回に向け職員も調べ成長していくと思っています。実際私もそうでした。知識をふんだんに取り入れた気分で講義をしますが、振り返れば反省点はいくらでも出てきます。そこを修正し次回へ向け気持ちを入れ替えていくことの繰り返しです。この発表を機に「うちでもやってみようか！」と感じてくれれば幸いです。